シリーズ●戦争の証言 1

小熊宗克

死の影に生きて

中学生勤労動員日記

敗戦の色がこくたちこめた戦争末期。すべての生活と思考を「聖戦」に埋没させられた中学生が、当時の日記やメモをもとに忠実に復元したあの日。色あせた紙のうえのかすかな筆跡から、はるかな歳月をこえて迫るなまなましい痛恨の思い。

¥1300　太平出版社

小熊（おぐま）　宗克（むねよし）

1930年千葉県我孫子町に生まれる。1943年我孫子町中央国民学校卒業。1948年東葛飾中学校卒業。1953年立教大学経済学部卒業。現在、秋葉原デパート勤務

死の影に生きて——中学生の勤労動員

1971年6月25日　第1刷発行
1988年9月20日　第7刷発行

著　者　小熊　宗克
発行者　東京都新宿区弁天町107　崔　容徳
印刷者　東京都文京区後楽2-11-2　道野整版所

発行所　東京都新宿区弁天町１０７番地　石嶋ビル
株式会社　太平出版社 ©
電話　03-204-1351(代表)　振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。定価はカバーに表示してあります。

シリーズ●戦争の証言①

小熊宗克

死の影に生きて

中学生勤労動員日記

太平出版社

シリーズ・戦争の証言1

死の影に生きて

太平洋戦争下の中学生勤労動員日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シリーズ・戦争の証言（第一期・全20巻）を完結するにあたって

1　一九七〇年から準備をすすめてきましたシリーズ・戦争の証言は、八年をかけて、ここにようやく第一期・全20巻を完結するはこびになりました。ながいあいだ熱心なご支持を賜わりました読者の皆さまにふかくお礼を申上げます。

もしこのシリーズが、むなしく風化しようとする一五年戦争の体験を正しくうけつぐ作業に多少でも貢献をすることができれば、わたくしたちの最も幸いとするところです。

2　この八年のあいだに、戦争体験を継承する作業が、戦争の体験者ばかりでなく、ようやく「戦争をしらない」世代にうけつがれはじめたことを、わたくしたちはつよく感じております。しかし一方には、「防衛力」強化の名による途方もない軍事力の拡張にみるまでもなく、日本軍国主義の復活への試みが、陰に陽に、さまざまな形で執拗につづけられていることも、見のがすことができません。

3　わたくしたちは、一五年戦争によってむなしく失なわれていったおびただしい生命と肉体が、いまだに真に弔われぬまま怨念の魂となってアジアの地を匍い空に満ちている、と認識しています。忘れることのできないあの日の体験の集積を、いっそう国民全体のものにすることは、やはりさし迫って重要なことに思われます。

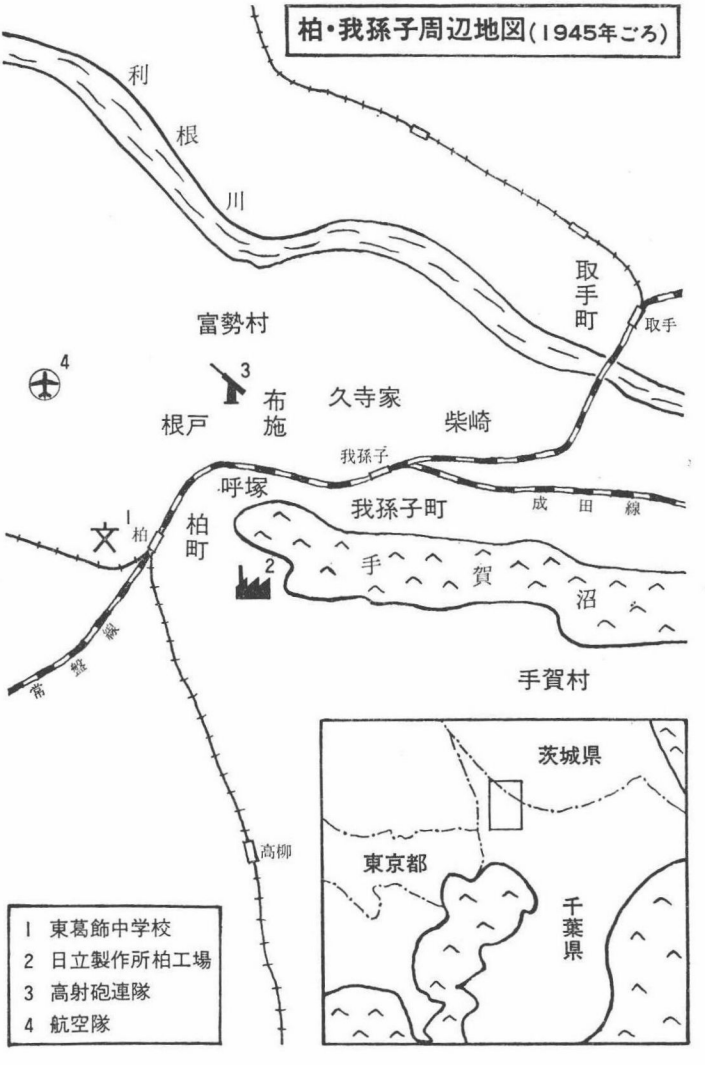
4　戦争中またはその前後に書かれた記録や資料（日記・メモ・手紙、その他）をお持ちか、その所在についてお心当りがありましたら、どのようなものでも結構ですから、小社までご一報下さい。すぐれた記録については、関係者のご承諾を得て、シリーズ・戦争の証言（第二期以下）に加えて刊行したいと思います。

一九七八年七月七日　　太平出版社　シリーズ・戦争の証言　編集部

シリーズ・戦争の証言1
死の影に生きて　目次

シリーズ・戦争の証言をおくるにあたって……太平出版社 12
一　いよいよ勤労動員令　一九四四年一月一九日～一二月八日(抄)……17
Ⅰ　決戦体制……18
Ⅱ　鍛えて待とう我らの番を……25
二　敗戦への道　一九四五年一月一日～八月二八日……33
Ⅲ　いよいよ工場へ……34
Ⅳ　現場配属……47
Ⅴ　あいつぐ空襲……69
Ⅵ　東京の空が燃えている……85
Ⅶ　ガリ版刷りの修了証……96
Ⅷ　和夫叔父さん、安らかに眠れ……120

Ⅸ 本土決戦の備え……140
Ⅹ ドイツ、無条件降伏……154
Ⅺ 柏工場学徒報国隊……165
Ⅻ 伊藤の死……187
ⅩⅢ 沖縄、全員最後の突撃の報……200
ⅩⅣ 天皇陛下、前線で指揮をおとり下さい……217
ⅩⅤ 夏・葉子・くちなし……232
ⅩⅥ 敗戦……246
ⅩⅦ 戦争とはいったいなんなのだ？……257
注……271
あとがき……小熊　宗克……279
柏・我孫子周辺地図（一九四五年ごろ）……16


柏・我孫子周辺地図(1945年ごろ)
利
根
川
取手町
取手
富勢村
4
3
布施
久寺家
根戸
柴崎
我孫子
呼塚
我孫子町
成田線
1
柏
柏町
2
手賀沼
常磐線
手賀村
高柳
茨城県
東京都
千葉県
1 東葛飾中学校
2 日立製作所柏工場
3 高射砲連隊
4 航空隊

いよいよ勤労動員令

一九四四年一月一九日～一二月八日（抄）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　決戦体制

一月一九日（水）晴

放課後、受持ちの川村先生が、朝礼で校長が話した「学徒勤労動員」[1]の説明をした。

川村先生は、黒板に大きく「緊急学徒勤労動員方策」と書いた。

数学より書道を担当すればいいのに、とかげぐちをたたかれるだけあって、どうどうとしていてうまい字を書く。

政府は、さしせまった決戦体制を早くかためるため、昨一八日、軍事動員だけでなく、国民動員も徹底しておこなうことにし、中等学校上級生も、戦闘配置につけることを決定したのだ。

もっとも、今回の動員令は、三年生以上が対象で、おれたち一年坊主は関係ない。

動員令がくだると、学業をすてて社会に出、軍需工場で兵器をつくったり、飛行場で飛行機の整備をしたりして、直接、戦争に役立つしごとをすることになる。

「上級生め、早く動員されればいい」と神戸がいう。おれもうなずいた。

じっさい、敬礼を忘れたの、帽子をあみだにかぶってるのと、すぐ制裁をくわえたがる上級生がいなくなれば、ずいぶんさっぱりするにちがいない。

柴崎の叔父が、子もちの銀ブナを一〇尾ももってきてくれた。演習指定地に朝早くしのびこんでとったのだそうだ。父が「憲兵[2]にみつかったらたいへんだからやめろ」と何度も注意したけれど、叔父は、「霧がいっぱいで見えやしねえ、寒いしなあ。舟でいくからみつかりっこねえ」とヘラヘラ笑っ

ていた。

祖父があらいをつくり、母がみそ汁をつくった。うまい。

五月八日（月）晴

大詔奉戴日。[3]

宮城遙拝。皇大神宮[4]遙拝。

白手袋をはめた教頭のタヌキがうやうやしく詔書を届けると、校長がやはり白手袋をはめて「開戦の詔勅」を奉読した。

校長の声はおもおもしく、いつ聞いても、身内のひきしまる思いとともに、「鬼畜米英撃つべし」の意気があらたになる。

つづいて前線将兵の武運長久を祈念。

あらためて壇上に立った校長は、「いよいよ本校にも学徒勤労動員令がくだり、六月一日から、五年生全員が日立製作所の柏工場に動員されることになった」といった。

期間は四か月。八月末までで、二学期には学校に帰る予定。

ただし、陸軍士官学校・海軍兵学校・海軍経理学校受験予定者は学校にのこって勉強。

教頭の注意――「中学校は、上級校への未完成教育機関であるから、学校を離れて現場の作業をするのは、学徒ほんらいのすがたではない。しかし、いまは非常時であって国家総力戦に協力するのはとうぜんの義務である。四か月間は、産業戦士になりきって、名門千葉県立東葛飾中学校の名をはずかしめないよう、いっしょうけんめいに励め！」。

日立の柏工場は、三年ばかり前にできあがったもので、こんど動員される五年生たちは、モッコをかつぎ、トロッコを押し、円匙〔掘土用の小型のシャベル〕をふるってその建設に従事したものだそうだ。

和夫叔父来宅。ライスカレーを三杯も食い、米を一升ももっていく。和夫叔父は大好きだけれど、おお食いなのだけは困る。そのくせすごくやせている。とうぜんのような顔をして、米や醤油をもっていかれると、すこし損したような気になる。

和夫叔父は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』をくれ、「こんどの日曜に上野へ連れていってやる」といった。きっと美術展でも見るのだろう。ついでに地下鉄で浅草へ連れていってもらおう。

五月三〇日（火） 曇

五年生・四年生合同動員壮行会。

五年生の動員に追っかけて、四年生も日立工場のすぐ手まえにある東京機器工業柏工場へ動員されることになった。

昭和一六年九月六日に、職員・生徒全員を隊員として「千葉県立東葛飾中学校報国隊」が結成されたとき、生徒の一人がつくったといわれる「報国隊歌」を斉唱した。

御稜威あまねき　日の本の
栄ゆる御代の　若人と
団結かたく　和に生きる
我ら東葛飾中学校報国隊

六月五日（月）

三年生全員が、二か月間、富勢村報国農場へ勤労奉仕。

この農場は、利根川の河原の遊休地を活用するために開拓したもので、ただ一面の草原だったのを畑に変えて食糧難打開を図ったものだ。

祖父にいわせると、「国策的大農場だなんて、のうがきいってるけど、でかい嵐がきて阪東太郎が氾濫したらどうする気だ。水のこわさも知らねえで。堤防だって切れるってのに危ねえこった」ということになるけど、ばかでかいりっぱな水門もできたし、洪水がおきてもだいじょうぶなようになってると思う。

とにかく見わたすかぎりの大農場で、おれたちも昨年から何度も勤労奉仕にいって、麦踏みやら舟底式甘藷畑づくりをやった。

はるかに筑波山をながめ、かたわらに大利根のゆうゆうたる流れを見ながら働くのは、なかなか雄大ではあるけれど、荒地で、開拓作業はくたびれることひととおりではない。

三年生以上がいなくなり、おれたち二年が最上級生となり、武道場・武器庫の当番はおれたちがあたることになった。

なかでもたいへんなのが武器庫[6]当番。銃剣の手入れは、時間をくうし取扱いがむずかしい。

組制にして、交替で放課後やることになり、黒部教官から武器の取扱いを教わる。

兵器取扱、保存及手入法

一　兵器ハ古来武士ノ魂トシテ我ガ国民ノ尊重愛護セシ所ナリ。故ニ之ガ尊重愛護ノ念ヲ高メ、益々尚武心ヲ発揚シ以テ精神ノ修養ニ資スルヲ要ス。

二　学校供用兵器ノ大部ハ国家有事ノ際、重要ナル使途ヲ有スルモノナルヲ以テ之ガ保存、取扱ノ良否ハ国防上影響スルコト特ニ大ナルモノアルコトヲ銘心スベシ。

三　兵器保存ノ要旨ハ常ニ適当ナル保護ヲ加ヘ其ノ機能ヲ保全シ以テ兵器ノ命数ヲ持続セシムルニ在リ。之ガタメ其ノ構造機能ヲ熟知シ且適切ナル手入具ノ使用ニ依ル取扱手入法ヲ励行シ、故障破損ノ原因ヲ予防スルコト肝要ナリ〔『中学校教練教科書』前編（術科之部）第一〇章から〕。

武器庫の中はうすぐらく、ちょっと鉄と油の匂いがただよっている。おもに三八式歩兵銃だが、ズラリと鉄砲が並んでいるのはゾクっとするすごさがある。

三八式というのは、明治三八〔一九〇五〕年日露戦争のとき制定された小銃、という意味だそうだ。

ずいぶん古い鉄砲だけど、いまでもじゅうぶん通用するほどすぐれたものだという。

しかし古いせいか、なかに弾倉ばねの堅いのがあって困る。おとなの力ならいいだろうが、おれや斉藤みたいに力のない者はとても片手じゃひっぱれない。ひきがねに足をかけるか、銃床を地面につけてひっぱればらくだけど、他人のみてるところでそんなことをしたら不敬罪でビンタものだ。教練のときひっぱたかれる材料ができたみたいで、ゆううつだ。

六月一二日（月）曇

三八式歩兵銃は、陸軍から払い下げるとき、ぜんぶ菊のご紋章をつぶしてくれたものかと思ったら、なかに菊花のご紋章のついたままのものがある。それをうっかりしていっしょに手入れしたもの

だから、教官にはり倒された。ご紋章入りの手入れは、布から、油から、磨き粉から、ぜんぶ別なのである。

「おそれおおくも大元帥陛下から下げ賜わった宝として、とくにたいせつにし、いささかの傷、いささかの錆を発生させてはならない」。

だから教練の時には、上級生でも菊花入り三八式歩兵銃は、体格のいい力のある者がもつらしい。

「教練は木銃の方が楽だな」と角川。

「竹槍だったらもっといい」と斉藤。

チビ組には三八式は骨が折れる。いままでは三年以上だったのに、みんないなくなっちゃったから兵器がだぶついたわけだ。

上級生が戻ってくるまで、おれたちが保管する義務がある。なんとしてもがんばろう。この武器をじゅうぶんに使いこなせなくては、いったん緩急あるとき、おくれをとることになる。

あの大久保彦左衛門の鷹の巣山合戦初陣が一六才だというから、あと二年、一六才までにはかならずや一人前の兵士になってみせる。

六月一七日（土）曇

九州に敵機来襲。元寇いらいどうも九州方面がねらわれる。なんか、かたすかしをくった感じだ。どうせなら九十九里へドンとこい。

わが軍の戦闘機は、まってましたと迎え撃ち、たちまち七機を撃墜、敵を撃退した。

黒部教官訓話――「神州は不滅、心配なし。されどわれらが任務はまさに重大、大御心を安んじ奉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com